

## 説教題：「神の恵みの時」 聖書：詩編 121

### 一阿佐ヶ谷と石神井での六〇数年間を振り返って

一九五七年、日本キリスト教団は五九年に迫った宣教一〇〇年に向けて、大きなビジョンをもって準備をしていた。一方石神井では設立準備が始まっていた。

石神井教会創立六〇周年ということであるが、この六〇年という歳月に今更驚いている。一九五七年のことである。私は二〇歳を少し過ぎたばかりであるから、はるかかなたの記憶の中にある。ただ石神井教会は阿佐ヶ谷教会の開拓教会であるということで、阿佐ヶ谷教会で神学生として過ごしていた頃から、強い関心を持っていた。

石神井教会は、創立者のお一人であった佐々木忠一教授が戦後早い時代、ある経緯から日本キリスト教団所属伝道所の名称を取得されていたというエピソードが伝えられている。最初のメンバーが一二人で、一二使徒などと呼ばれて、はじめは三宅さんのお宅で家庭礼拝と言うかたちで行われていた。それがいよいよ、辻さんの広い宅地の一部に移転することになり、阿佐ヶ谷教会の青年会が総出で、宅地の整備や、建築のお手伝いなどのご奉仕をすることになったのは懐かしい思い出となっている。教会の歴史を述べることは、同時にこれに属している私たちの、こころの歴史、信仰の歴史を語ることになると思う。

一九七三年であったか、私は当時の阿佐ヶ谷教会牧師大村勇先生、令息修文さんの三人で、軽井沢に泊まり込んで、阿佐ヶ谷教会五〇年史を編集したことを思い起こしている。私は阿佐ヶ谷教会には高校一年生であった一九五二年から十五年間いたので、教会の歴史を編纂することは同時に自分自身の青年期の人間形成の時代に、自分の精神形成を回想する機会であった。

ところがこの時代、日基教団全体も、阿佐ヶ谷教会の教勢は減少していた。大村勇先生この実態に触れて、「阿佐ヶ谷教会の栄光に時代は去った。今あるのは深い挫折感と不満である」率直に述べている。

「阿佐ヶ谷教会の栄光の時代は去った一われわれの間にあるのは深い挫折感であり、不満もくすぶっている。阿佐ヶ谷教会の五〇年の歴史の中で訪れた「悩みと苦しみの日」（哀歌一・七）である。第二イザヤ書四〇～五五章は旧約聖書の最高峰の思想、信仰が記されているという・・・「悩みと苦しみの日」にこそ、私どものそむきと、強情の者とをじっと背負っておられる神がはつきりするのであり、私どもは「背負われている」という受け身の姿を心の底から祝えるのである。「私は造ったゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う」（四節）とのみ言葉をその時、聴くことができる、教会の歴史はその時本当の栄光の歴史である。このみ言葉に教会が真に生かされる時、低迷はもはや過去のものとなることを堅く信じてこの五〇周年の結びとしよう」

石神井教会創立以来今もお元気でおられる方もおれば、数年あるいはごく短期間過ぎさ

れた方のおいでになる。私の場合はわずか六年でしかない。そして最後は家内の病気を理由に辞任させていただいた。もう一つの理由は、宣教師ルツ・ヘットキャンプさんから、いのちの電話開設という新しい事業を担う役割に招かれた。しかしそのために、私の辞任をめぐっては教会総会で、少なからずの会員の方から、厳しいお叱りを頂戴した。いまでも申しわけないと思っているが、もう一つ、家内が肉体的にも、精神的にもきわめて困難であったことをご理解いただきたい。今日はこれ以上弁解をしない。

わずかな期間ではあったけれども、この教会で祈り、聖書を解き明かし、石神井の森で黙想した。ある時な涙を流し、憂い悲しみ、またある時にはこころ満たされ、微笑んだ。今もこの石神井の地には、そうしたこころの記念碑があり、こころの歌がある。

詩編一二一はイスラエルの人々が、故郷を憧れるように読んだ詩であり、歌である。巡礼者たちが、エルサレムを憧れた詩である。長い旅の途上、互いに歩きながら歌い交わした望郷の賛歌であるとも言われる。民衆たちが「私の助けはどこから来るであろうか」と問いかけると、祭司たちが「よろめかないようにしてくださる」と神に代わって歌い交わしたと言われる。すぐれた美しい巡礼の歌であり、望郷の詩である。

「私の助けはどこから来るのか。

私の助けは来る。天地を造られた主のもとから」(詩編一二一)

これはイスラエルの人たちが、バビロンというところで捕囚と言って、囚われの身にあった人たちが、解放されて、エルサレムに帰還する巡礼の旅の途上で歌われたと言われる。バビロンの平野を後にしてダマスコに近づくと、ヘルモン山が悠然とそびえている。それからさらに山また山が続く。聖地エルサレムはどこであろうかと、望郷の思いに駆られて思わず歌われたのが、この詩編であるとも言われている。アラビアの砂漠を通過して、エルサレムに至る旅路は山地を通過するだけでなく、砂漠もあり温度差は五〇度もあり、太陽はもちろん、月でさえ「撃つ」ような恐怖であったという。これは月も暑さを伴うということではなく、冬の時期砂漠を通過するとき、月の光は表面から寒気がにじみ出てくるようであったと言われる。ヨーロッパでは月の光を *lunatic* といって狂気を促すとも言われてきた。こうした問題は現代で言えば、自然環境、生活環境さらには社会的・政治的状況の厳しさとも言える。

じつは牧師先生にはご報告したが、ちょうど一週間前に私は死ぬかと思うほどの車両事故を経験した。先週金曜日の夜、私の車エンジンが異常な作動をしていたのが、次の日の土曜朝、車のエンジンをかけるとそのまま急発進して、二〇メートル先のお宅の玄関に激突した。直ちに救急車で新宿の東京医大病院に搬送され、二時間余りスキャナーなどで検査があった。結果は、多少打撲傷はあるものの特に異常なしということで、タクシーで帰宅した。ご近所の車はじめ建築物の破損はあったものの、人身事故はなく、後の事故処理は保険会社に託しているが、ほぼ保険で補償できる見通しとなった。

自動車販売会社は車両の異常を否定、警察は運転ミス。そこで自らの認知症に起因する

運転ミスを疑った。保険会社は車両の異常を証明できず、結果としては単純な運転ミスで処理された。私は直ちに免許証を返上した。

ただ私は今回事故を起した場所は、たいへんつらい場所になってしまったけれども、少年のころ神との出会いの場所でもあった。隣近所に二人の元立教大学学長が住み、戦後は山口淑子（李香蘭）が住み、私は家族ぐるみで家に入出入りしていた。そして三分ほどのところに、阿佐ヶ谷教会があった。杉森中学の同期生には当時石井道子さんがおり、すでに阿佐ヶ谷教会に通っていた。また近隣には教会関係者だけでなく、北原白秋といった文化人も住んでいた。一九四〇年、私の父が亡くなった時は、白秋も弔問に来てくれた。その翌年は白秋自身が亡くなり、私は五才であったが、葬儀に参列した記憶がある。じつは今回は、今も親戚が住んでいる白秋宅に車を激突させてしまったのである。

高校一年生の時、阿佐ヶ谷教会では賀川豊彦による講演会があった。賀川によれば、彼がプリンストン大学に留学中、物理学者アインシュタインはドイツでナチに追われて亡命、プリンストンで教授をしていたという。賀川は、そのアインシュタインが大学のチャペルでいつも祈っていたというエピソードを紹介してくれた。私は当時一六才の少年であったが、その真偽を確認もせず、これ聴いただけで教会に通う決心をした。

それにしてもこの歳になって、なぜこのような事故に直面したのか。少なくとも今は分からない。でも本来ならば死ぬ可能性もあったのに、生かされてということは、なおも残された人生を生き、なおなすべき課題があるということなのか。まだ神は答えを下さらない。これからしっかりと謙虚に考えたいと願っている。